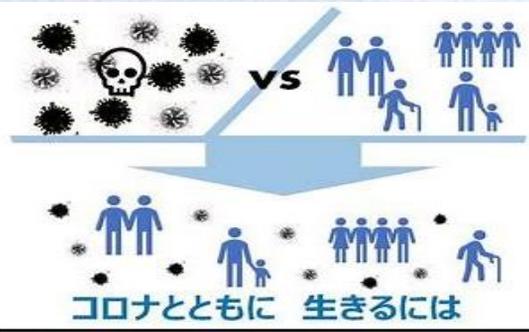




# カウンセラーだより

たじま絆保育園 2022. 2・3月号

保護者の皆さま、こんにちは。オミクロン株が猛威を振るうなか、いかがお過ごしでしょうか？恐らく、へきへきしている方も少なくないでしょう。感染症の専門家ではありませんが、コロナ禍における社会とそれに対する向き合い方について、心理の専門家として一つの提言を出してみたいと思います。少しでも皆さんやご家族など身の回りの方の安寧につながりますように、こころから祈念しております。



## 「コロナと社会病理」

先日、ある番組において、「日本(人)は、コロナ禍における死を受容できているのか？」という趣旨の論戦を政治家や医師が繰り広げていました。つまり、「諸外国では死を自然なものとして、コロナを受け入れつつある、すなわち感染者数が増えてきても、ウイズコロナの政策を打ち出し、展開しているのに、日本(人)はまだコロナを完全に封じ込むことばかりに躍起になっている」「確かに一人でも多く人命を救うのは大切な事であるが、コロナによる死を恐れるあまり、人々の自由を制限し、経済的な困窮が生まれ、こころの疲弊を生んでいるのではないか」というテーマについて活発な議論がなされていました。確かに、今のゼロコロナを目指しているかのような政策の裏には、どうも几帳面な日本文化を象徴している気がしてなりませんし、人の命より経済政策を取るなんて何事だ、と言われる罪悪感を私たち日本人は恐れているため、ウイズコロナが進みにくいような気がしています。いつから私たちは死が遠くにあるものだと思ってきたのでしょうか。これにはいろいろな背景、要因があると思いますが、まず死は怖いですからあまり考えたくありませんし、豊かな生活のおかげで死を目の当たりにすることも少なくなってきました。でも、よくよく考えてみれば、人はいつか死にます。だからこそ日々生きていることに感謝し、謙虚に生きていこうとする、ありがたみの精神が生まれてくるのです。

人の命なので足し算引き算でもないのですが、人の命を助けようとコロナ禍における政策がなされているのに、コロナがすべて原因とは言えないものの、確かに自殺者数は増加しており、出生率は下がっていて、結果として日本の人口動態は減っているようですから、皮肉な話だと思います。しかし、一方で、コロナ禍において世界的な人流の制限がなされた結果、大気汚染が緩和され、それによる死者数を間接的に減らしたとか、もしかすると外出の自粛から事故死も少なくなっていて、さらには大衆衛生の観点から、コロナ以外の死者数は減っているとすると、もはや人が増えているのか、減っているのか、それともあまり変わらないのかは、世界的にはよくわからなく、もはや天文学的な領域に入ってくるのだと思います。ですから、人や社会が死をある程度防ぐことができたとしても、死のすべてを、あるいは死を最後まで人や社会がコントロールするのは無理な話であると思います。もちろん、だからといって国も社会も個々人も何もしません、というわけではないのですが、結局、わたしも含めて死を受け入れるのは到底難しく、死を恐れながらも生きようともがくのが私たち人間のようなようです。これはコロナ禍において如実に表れ、いかに私たちは死の恐怖によって踊らされているか、とくと分かったのではないのでしょうか。だからこそ、冷静に、客観的に、コロナを見つめる必要があります。感情的になってはいけません。それこそコロナの思うつぼです。コロナには心理的な汚染という意味合いもあって、過度な恐れや不安から偏見が生まれ、そこから人への攻撃や暴力などの差別につながることも少なくありません。ですから、コロナ憎んで人憎まず、です。みんな被害者です。未曾有、混とんとした、新たなウィルス、脅威に国も自治体も私たちのために思い、必死に働いてくれています。こちらも人への思いやりを持って、協動的に社会と調和するべきだと思います。

## 4月～5月のお知らせ

- ・ 来年度の編成がまだ決まっていがないため、詳しい巡回日時については3月の中旬以降に園までお問い合わせください。

